浄土教における厭離穢土の教理史的研究

高田文英

最初に論文の構成を記す。

序　論
第一章　厭離穢土の基礎的考察
第一節　仏道一般の形態と厭穢欣浄
1　初期・大乗仏教の仏道形態
2　浄土教の厭穢欣浄の仏道形態
3　小結
第二節　漢訳経典における「穢土」の用例と厭離穢土
1　漢訳経典における「穢土」の用例
2　「穢土」の用例の検討と浄土教の穢土観
3　小結
第三節　仏教と浄土教における「厭離」
1　初期仏教における「厭離」の意味と修道上の位置づけ
2　浄土教における「厭離」
3　小結
第二章　厭離穢土の成立
第一節　原始浄土思想と厭離穢土
1　浄土教の成立と浄土経典
2　原始浄土思想における極楽の性格
3　原始浄土思想と厭穢欣浄
4　原始浄土思想における発心の形態
5　原始浄土思想における厭離の心
6　小結
第二節　『観無量寿経』における厭離穢土
1　厭離穢土の独立
2　厭離の心と滅罪
3　厭離穢土が重視される理由
4　小結
第三節　曇鸞『往生論註』と厭離穢土
1　『往生論註』と厭穢欣浄
2　罪業の止滅をめぐって
3　曇鸞の浄土理解
4　八番問答「三在釈」に見られる厭離の心
5　小結
第四節　浄影寺慧遠の浄土経典註釈書に見られる厭離穢土
1　浄土教の特徴としての厭穢欣浄
2　往生の実践論における厭離の心
3　小結
第五節　道綽浄土教における厭離穢土
1　『安楽集』と厭穢欣浄
2　厭離の心への注目

3　無後心・無間心の解釈
4　善導の浄土教に与えた影響
5　小結
第三章　厭離穢土の展開
第一節　善導浄土教における厭離穢土
1　善導浄土教と厭穢欣浄
2　厭離の心と滅罪
3　機の深信について
4　小結
第二節　源信浄土教における厭離穢土
1　大文第一「厭離穢土」の意義
2　無後心・無間心の解釈
3　不浄観について
4　『往生要集』の修道的な性格
5　小結
第三節　法然浄土教における厭離穢土
1　法然浄土教と厭穢欣浄
2　厭離の心の行的受容
3　厭離の心を行と規定しない背景
4　機の深信について
5　小結
第四節　親鸞浄土教における厭離穢土
1　親鸞浄土教と厭穢欣浄
2　横出における厭離の心
3　横超における厭離の心（一）
4　横超における厭離の心（二）
5　小結
結　論
参考文献一覧

序論

本論文は、浄土教の漢文典籍（経・論・釈）上に見られる厭離穢土の思想について、その歴史的展開を浄土教理史の立場から論じようとするものである。

一般的には、「厭離穢土」の語は「欣求浄土」と対をなし、浄土教の基本思想として理解されているが、この厭離穢土欣求浄土は、浄土教成立当初から文言の上で明確に表現されていたものではなく、〈無量寿経〉や『阿弥陀経』からは成立の遅れる『観無量寿経』（以下『観経』）に至り備えられた性格であると考えられる。

『阿弥陀経』や〈無量寿経〉では、最初から仏・浄土の側＝欣求浄土について説かれ、また、衆生の発心の形態も、穢土を厭離することから浄土を欣求することへと展開する形では説かれておらず、あくまで欣求浄土の心を中心としたものとなっている。これに対して『観経』は、冒頭に穢土を厭離する韋提希の姿が説かれ、これを契機として欣求浄土へと展開している。

本論では、こうした浄土教文献上に見られる厭離穢土に関する説示の相違について、単に表現上の相違とのみ見るのではなく、思想面での変化を反映したものと捉え、その思想的な意味を読み解いていくこととしたい。

とくに留意すべき点として、厭離穢土の思想には、初期仏教の修行に淵源する出家主義的・聖道的な性格が本来的に含まれており、

これが浄土教のなかで表だって説かれることで、「執着を離れること」が、浄土往生のために実践されていったことが挙げられる。またその一方で、本願力による救済を眼目とする浄土教理解のなかにあっては、厭離穢土の思想は聖道的な性格とは趣を異にする位置づけにおいて展開していったことも知られる。

以上のように本論文は、浄土教における厭離穢土の思想に歴史的展開のあることを指摘し、成立期の浄土教から親鸞に至るまでの教理の流れを論述するものである。

第一章　厭離穢土の基礎的考察

第一節　仏道一般の形態と厭穢欣浄

厭離穢土欣求浄土と表わされる浄土教の仏道形態の基本的な性格について、空思想に立脚する大乗仏教ならびにそれ以前の初期仏教（部派仏教を含む）との比較により考察する。無論、浄土教以外の仏道の形態にも多様なものがあるだろうが、浄土教の性格を規定する上での指標として、これを初期仏教（部派仏教を含む）と大乗仏教とに二分して整理を試みる。

初期仏教は現実世界（迷いの世界）を厭離する実践を中心として教えを構成するもので、分別的思考に即した仏道の形態となっており、さとりの世界は、迷いの世界の消滅という形以外には、表現され得ない言葉を超えた世界で、初期仏教の仏道のなかには、無分別のさとりの世界は直接対象化することのできないものとして、仏道の埒外に置かれている。①

これに対し空思想にもとづく大乗仏教は、本来表すことのできない無分別の世界を直接に説き、これを作願・観察の対象としていくことがより高次の仏道であると説く。

厭穢欣浄の仏道形態をとる浄土教では、極楽浄土というさとりの世界を対象化し願生する点において大乗仏教の一流と言えるが、極楽浄土とは、本来分別的思考のままでは対象化され得ないさとりの世界が、如来の方便により対象化可能な形（指方立相）を取って示されたものであると説き、浄土へ往生することが、分別的思考のままで無分別の世界を得ていく道であると説く。②

こうした浄土教の仏道形態は、大乗仏教が、現世において浄穢不二の無分別智を悟ることを目指すのに対して、あくまで浄穢を分ける分別的思考に即し、現実世界を捨てられるべき厭離の対象とする点において、初期仏教との共通性を指摘することができる。

第二節　漢訳経典における「穢土」の用例と厭離穢土

浄土教が厭離の対象として説くところの「穢土」の語に焦点を当て、漢訳経典における「穢土」の語の用例調査から、「穢土」と表わされる浄土教の現世観には、初期仏教には見られない大乗仏教としての思想的特徴が見られることを論じる。

漢訳語としての「穢土」の語の成立は「浄土」の語に遅れるもので、③成立の面からも用例の面からも、「浄土」の対義語としての性

格が認められる。また、穢土（現世・娑婆世界）には、仏・菩薩の利他活動の場、仏の教法に遇うことのできる場としての肯定的な意味が与えられている。④

そして、「穢土」の語がもつこれらの性格は、「穢土」の語が「浄土」との強い関係性のなかで現世を捉える言葉であることを示唆しており、とくに、「穢土」は「浄土」からのはたらきが向けられている世界であるとの視点は、浄土教で厭離穢土の思想が受容・展開されていく上においても、着目されるべき視点である。

浄土教の厭欣思想は、穢土を離れ浄土を欣う、すなわち穢土から浄土への方向性を基本に持つものと言えるが、同時に、浄土から穢土への方向性というもう一つの視点からも捉えられるべきものであることは後述するが、こうした浄土から穢土への視点がすでに大乗経典の穢土観のなかに見られることは、浄土教の厭欣思想と大乗仏教の思想展開との関連を窺わせる。

第三節　仏教と浄土教における「厭離」

初期仏教の文献を中心として、仏教における厭離について、その内容と仏道上の位置づけについて整理し、その上で、浄土教のなかで説かれる厭離の心の特徴について論じる。

第一節で、現実世界が捨てられるべき厭離の対象とされるという初期仏教と浄土教の共通性を指摘したが、本節は仏道の実践面から、初期仏教と浄土教の厭離の心の位置づけについて比較するものである。

厭離の心は、迷いの世界や自身のありさまなど、主に迷いのありようを認識するところに生ずる心であり、それは動揺・戦慄・怖畏などの語によって表わされるような否定的な感情である。⑤初期仏教では、これが発心としての性格において受容されると同時に、煩悩を滅除する修行の一つとして、行的な性格においても受容されている。

そして、浄土教における厭離の心にも、こうした性格が継承され、欣求浄土の心へと連なる発心としての性格を基本としながら、行的な性格においても受容され、とくに滅罪の問題と関連して説かれるものが多く見られる。

また注目すべきは、浄土教における厭離の心（否定的感情）には、滅罪のはたらきをもつものではなく、仏力による救済と関連するものが見られる。前者を行的な性格を色濃くもつ厭離の心と規定するならば、後者は悲歎を表出し仏の救いを請う信的な厭離の心と言うことができる。

両者はその性格において相反するものと言えるが、浄土教はこの両面における厭離の心を含みながら展開していったのであり、このような厭離の心の二側面に注目することが、浄土教が阿弥陀仏の本願による凡夫救済という他力的な性格を露わにしていった過程を明らかにする上に、有効な視点であると考えられる。

第二章　厭離穢土の成立

第一節　原始浄土思想と厭離穢土

原始浄土思想と厭離穢土の思想について、主に現存〈無量寿経〉中最古の『大阿弥陀経』を取り上げて考察する。

原始浄土思想ならびにそれを継承する〈無量寿経〉においては、もっぱら欣求浄土の側を中心とした性格であることが指摘できる。経典の構成については、厭離穢土を前に置くことなく、最初から阿弥陀仏とその国土について説き出され、後の付加と考えられる五悪段を除いては、全体を通し厭離穢土に属する内容はほとんど説かれない。

発心の形態についても、阿弥陀仏からのはたらき（名号・光明）との出あいを契機として、歓喜等の心が生ずると説かれるのが基本形である。一部には、歓喜の心に伴い、厭離の心が生ずることも説かれているものと見られるが、いずれにせよ、仏教一般に広く説かれる、迷いのありさまを見ることを契機として厭離の心を発すという発心の形態とは異なり、仏・浄土からのはたらきとの出あいが発心の契機として説かれる点に特徴がある。

原始浄土思想ならびに〈無量寿経〉が、こうした欣求浄土中心の性格をもつ理由について、以下の三点が考えられる。

一点目は、説き方の問題であり、〈無量寿経〉において厭離穢土の側に属する苦悩からの救い等の問題は、仏・浄土の徳を説くなかに包摂されている。それは、厭離穢土の問題を扱っていないということではなく、欣求浄土の側に摂めて説くという、説き方の相違がそこにあるものと考えられる。

二点目は、信仰動機に関する問題で、原始浄土教の信仰動機は、阿弥陀仏に会いたいという現在仏への思慕にあったとされている。⑥極楽を願生する目的は、現在仏に会うことにあり、裏返して言えば、迷いの世界からの離脱という厭離穢土の願いは、無論あったことは容易に想像されるものの、中心的な目的としては位置づけられていなかったことが考えられる。

三点目は、往生の可否に関する基準の問題で、〈無量寿経〉は全体の傾向として、阿弥陀仏の光明・名号による救済力を讃えることに力点が置かれ、衆生の往生の問題もまた、こうした仏からのはたらきを信受することに重点が置かれているものと見られる。発心の契機がつねに仏からのはたらきに出あうことに求められているのも、こうした往生の問題、救済の問題と関連させて理解することができるものと見られる。

第二節　『観無量寿経』における厭離穢土

『観経』は、中央アジアから中国にかけて成立したものと考えられるが、⑦浄土教の特徴が厭離穢土欣求浄土と理解される起源は、本経にあるものと言える。

『観経』の構成は、厭離穢土から欣求浄土へと次第する形をとり、

発心の形態も、現世の苦悩に出会うことを契機として厭離穢土の心を生じ、そこから欣求浄土の心へと展開していくもので、仏教の一般的な発心の形態と同致するものと言える。

厭離の心は、発心としての性格に留まらず、滅罪の問題とも関連するものとして説かれている。その場合の厭離の心に関しては、厭離の心そのものに罪を滅するはたらきを求め、行的な性格において採用する立場と、厭離の心そのものに、罪を滅するはたらきを求めるのではなく、仏力により罪が滅されることを求める上から、厭離の心を仏力をうけるために必要な信的な性格のものとして採用する立場があるものと推測されるが、経文の上に十分明らかではない。

このように『観経』においては、〈無量寿経〉に比して厭離穢土の側に関する内容に重きが置かれていることが知られるが、その理由について、以下の三点を指摘できる。

一点目は、説き方の問題として、つまり〈無量寿経〉にあっては仏・浄土の徳を説くなかに包摂されていた厭離穢土の側に属する問題を独立させ具体化させることで、浄土願生の動機付けをより明確に示そうとしたものと理解される。ただしそれだけで説明することは不十分であり、以下の点が合わせて考えられるべきであろう。

二点目は、信仰動機に関する問題で、極楽への往生の目的が、『観経』に「仏当(ニ)為(ニ)汝(ガ)分(シ)別解(ス)説(ク)除(ノ)苦悩(ヲ)法(ヲ)」(真聖全一、五四頁)等とあるごとく、仏に会いたいという浄土教の成立段階における願いから、苦悩の現実世界・業の繋縛からの離脱へと中心が移行していくという、思想自体の変遷が考えられる。⑧

三点目は、往生の可否に関する基準の問題で、『観経』では往生の可否を決する基準のなかに、滅罪の問題が強く意識されている。阿弥陀仏による救済が説かれる点は〈無量寿経〉と同じでも、その威神力が、滅罪の多少により表現されている点が大きく異なる。『観経』はこうした滅罪を重視する立場をとるがゆえに、厭離の心が発心としての性格に留まらず、より多様な性格において採用されているものと言える。

第三節　曇鸞『往生論註』と厭離穢土

本節以降はこれまでに見た浄土経典における厭離穢土の思想が、中国の浄土教において受容されていった過程について見るものである。

曇鸞の『往生論註』は、「穢土」と「浄土」の語が、阿弥陀仏の極楽世界への願生思想である浄土教のなかに導入された最初の文献であり、本書の「穢土」の語の直接的典拠は、曇無讖訳『大方等大集経』と考えられる。

しかし本書では、厭離穢土から欣求浄土という『観経』型の説き方がなされず、最初から欣求浄土が中心に置かれている。その主な理由について、本書における往生の目的が、苦悩の世界からの離脱という自利の面にあるのではなく、浄土における菩薩道の増進という利他の面にその中心があることが関係しているものと考えられる。

そして、阿弥陀仏とその浄土を作願・観察するところに、滅罪の問題は自然と解消されるのであるから、厭離の行を別に修する必要はないことが説かれるなど、厭離穢土の側に属する問題が、仏・浄土の徳を説くなかに摂められている。こうした説き方は欣求浄土の側のみを表とする点において〈無量寿経〉の説き方と同致するものと言えよう。『観経』の影響下に展開する中国浄土教においては特異な例である。

なお『往生論註』のなかで、唯一否定的な感情の表出である厭離の心を説くと見られるのが、上巻末の八番問答三在釈のなかの無後心・無間心（真聖全一、三一〇頁）である。この無後心・無間心は『観経』下品下生段を背景としたもので、後に道綽や源信において、悪人の救済の可能性の一端を、臨終時に地獄の火が迫り来る恐怖心・心力の勇猛さに求める文拠として注目されていくところである。

第四節　浄影寺慧遠の浄土経典註釈書に見られる厭離穢土

浄影寺慧遠の浄土経典註釈書（『無量寿経義疏』・『観無量寿経義疏』）に見られる厭離穢土の思想について考察する。

慧遠の浄土教理解には、『観経』の影響が大きいものと見られる。『無量寿経義疏』においても、

特留此経百歳済度。以下此経中開示浄土令中人求生。故偏留之。大涅槃経顕示仏性。教聖中深。聖人先隠。為是先滅。此経教人厭苦求楽。済凡中要。為是後滅。法随人別。故滅不同。（大正三七、一一六頁上）

と、厭離穢土欣求浄土の『観経』型の綱格をもって浄土教の性格を示す。浄土教は声聞蔵の教えではなく菩薩蔵の教えであるが、仏性を説く『涅槃経』と比較すれば、浄土教は「厭苦求楽」という苦楽相対の立場にあり、凡夫のための教えであることが説かれる。

厭離の心については、発心としての性格だけでなく、滅罪を目的とした行的な性格も認められ、同様に『観経』の影響が考えられる。一方、厭離の心を、仏力による滅罪を求める立場から信的な性格においてこれを受容するといった、救済教的な性格を強くもつ解釈を見ることはできず、例えば『観経』下品下生段の悪人の滅罪往生に関しても、「重悔」つまり勝れた懺悔の行を修することが可能であれば滅罪して往生することができると説かれるなど、あくまで自因自果的な理解を基本としているものと言える。

第五節　道綽浄土教における厭離穢土

道綽の『安楽集』では、『往生論註』の影響をうけながらも、欣求浄土から厭離穢土を独立させ、穢土・浄土を相対させて両者の性格の相違が示されている。すなわち、曇鸞が〈無量寿経〉のようにもっぱら欣求浄土を中心とするのに対し、道綽は『観経』の綱格にしたがって、欣求浄土の柱とは別に厭離穢土の柱を立て二本柱の構成としている。

また、発心の形態においても、厭離から欣求へと次第する形で示

し、厭離の心を浄土教の発心として強調する意図のあることが窺える。そのことは、第三大門の「第一明下従二無始劫一来、在レ此輪廻無窮受レ身無数上者」（真聖全一、四〇七頁）の一段に顕著であるが、その他にも、教えを説く者と聞く者との心構えを示した第一大門「説聴方軌」のなか『平等覚経』引文では、原文の「慈心歓喜、一時踊躍、心意清浄」（真聖全一、一八二頁）という歓喜等の肯定的な感情を表している箇所を、道綽は「心生二悲喜一」（真聖全一、三八〇頁）と改めており、悲歎や慚愧等の否定的な感情を浄土教の発心の基本に据えようとするものと見られる。

なお、『安楽集』に説かれるこうした厭離の心の表現は、善導の浄土教文献の上に、その直接的な影響を看取することができる。善導においては、『安楽集』で浄土教者の発心として強調された厭離の心をうけながら、これを懺悔や滅罪との関連においても重視していくという展開が見られる。[9]

第三章　厭離穢土の展開

第一節　善導浄土教における厭離穢土

善導においては、慧遠や道綽と同様、教えの構成・発心の形態について、厭離穢土から欣求浄土へという『観経』型の形態が取られている。また、業の繋縛からの離脱という問題が往生思想のなかで大きな課題となることに伴い、厭離の心は発心としての性格だけでなく、滅罪と関わるものとして注目されている。

善導における特色は、厭離の心そのものに滅罪のはたらきを求める行的な性格においてもこれを受容しながら、全体の傾向としては、信的な性格をもつものへと傾斜している点にあると言える。『法事讃』に、

> 道場衆等、尓許多人、歴劫已来巡二三界一、輪廻六道一無二休止一。希見二道場一請二仏会一、親承供養難二思議一。七周行道散レ華訖。悲喜交流願二滅罪一。（真聖全一、五七五～五七六頁）

諸仏皆来化、無明業障不二相逢一。慙愧釈迦弘誓重、不レ捨娑婆十悪叢一。希遇二道場一聞二浄土一、騰神永逝出二煩籠一。衆等傷レ心共悲歎、手執二香華一常供養。（真聖全一、五八七頁）

等と説かれるように、自らの罪業に対する「傷心」や「悲歎」が説かれ滅罪が願われている。これらに示される自身のありように対する否定的な感情は厭離の心であり、また懺悔の一形態とも見ることができるが、自力的な懺悔とは趣を異にし、自力では滅罪が叶わず出離の縁なしとの認識に立ち仏に対して悲歎・慚愧を表出するもので、仏の慈悲を呼びおこす意味がそこに求められているものと見られる。[10]

そして、『観経疏』「散善義」に見える機の深信[11]は、こうした信的な性格をもつ厭離の心が、信心の形態において示されたもので、信心の形態をとっているがゆえに文そのものに直接的な感情の表出は説かれていないが、仏に対する悲歎の表出すなわち厭離の心がそこに含意されており、仏の慈悲を呼びおこす意味が付与されているも

のと考えられる。⑫

第二節　源信浄土教における厭離穢土

『往生要集』は冒頭に「厭離穢土」章が置かれ、本書は教えの構成からも発心の形態からも、厭離穢土から欣求浄土へと展開する『観経』型を受け継ぐものと言える。

「厭離穢土」章の位置づけは、法然が「厭離穢土」章を含む最初三章を「修行の方便」（昭法全、四頁）と規定しているように、浄土往生の実践へと至る導入（発心）としての意味をもつと見るのが基本であろう。

ただし「厭離穢土」章の総結厭相に、

諸法空観尚不レ妨二大慈悲心一、何況苦・無常等、催二菩薩悲願一乎。是故『大般若』等経、以二不浄等観一、亦為二菩薩法一。若欲レ知者、更読二経文一。問。如レ是観念有二何利益一。答。若常如レ是調二伏心一者、五欲微薄乃至臨終、正念不レ乱、不レ堕二悪処一。

（真聖全一、七五六頁）

と、苦や無常を観ずることにより煩悩が微薄となることが説かれるように、厭離の心は発心としての性格に加え、自力的・行的な性格においても受容されていることが知られる。

なお、こうした行的な性格の厭離の心のもつ機能として、源信はとくに不浄観の行に、観念成就の方便としての意味を見ているものと考えられる。これは『摩訶止観』に説かれる不浄観の説示（大正四六、九三頁中～）をうける源信の特徴的な理解であると言える。

本書には厭離の心について、善導の上に見られたような仏道そのものが成り立たないという悲歎や慚愧の表出すなわち信的な性格の厭離の心は見られず、発心としての性格を基本としながら、そこから展開して滅罪の行や観念成就の方便といった自力的な役割も求められている、と考えられる。

第三節　法然浄土教における厭離穢土

法然は厭離穢土から欣求浄土へという『観経』・『往生要集』に代表される説き方を承けながら、『往生要集詮要』では、

今此五門中、厭離与二欣求一二門、即修行方便也、念仏与二修行一二門、正往生業因也。

（昭法全、四頁）

と、厭離・欣求の心を「修行の方便」と規定して、「往生の業因」（＝行）でないことを示し、厭離の心に往生の因に資助する役割を求めていくような従来の理解を廃している。これは法然の専修念仏の立場からすれば当然の主張であろう。

しかし一方で、法然は行としての厭離の心も、善導の『観経疏』「散善義」至誠心釈の自利真実の文をもとに受容していることが、『七箇条の起請文』⑬等から知られる。厭離の心がもつ煩悩を制捨する行的な性格について、往生の因（安心門）としては厳しく廃しつつも、他方、念仏者の生活規範（起行門）を示す思想的根拠⑭としてはこれを採用し、造悪無碍の異義に陥らないよう、適宜用いていっ

たものと見られる。

翻って『往生要集詮要』の「修行の方便」という規定を考えると、往生の因としては廃するが、浄土信仰の基調となる心としては受容するというやわらかな意味も見てとることができ、ちょうど菩提心を行と規定して意図的に廃していったのとは反対に、「修行の方便」と規定することで、厭離の心の煩悩を制捨する行としての側面を念仏者の生活のなかに導入する余地を残しているのではないかと推察される。

また、善導においては、機の深信は自身に対する厳しい認識であり、そこに悲嘆や慚愧等の厭離の心が含まれていたのに対し、法然の理解はこれと異なるもので、機の深信は自身のありさまを表したものではなく、念仏による平等往生の絶対性を示すために、披救済者の具体例（罪悪深重の凡夫）が示されたものと考えられる(15)ため、法然における機の深信は、厭離の心の展開史の上に位置づけられるものではないと言わねばならない。

法然の法語類には、善導において多く見られた慚愧や悲嘆等の厭離の心を表わす言葉をほとんど見ることができないが、これも、法然の説く信心（機の深信）が、厭離の心と結びついていないことが主な原因と考えられる。

第四節　親鸞浄土教における厭離穢土

『教行証文類』の総序が「竊以、難思弘誓度二難度海一大船、無碍光明破二無明闇一恵日。」（真聖全二、一頁）と、迷いのなかにある衆生を救済する仏力を讃嘆することから始められているように、親鸞においては真実教・方便教のいずれの立場においても、仏・浄土の側のはたらきを表とした説き方がなされている。また、発心の形態においても、十八願成就文の「聞其名号」、『愚禿鈔』の「横出者易行道之教、以二忻求一為レ本」（真聖全二、四六六頁）など、いずれも仏・浄土の側との出あいを契機とするものであり、〈無量寿経〉の説き方・発心の形態を継承していると見ることができる。

厭離の心について、往生の因に資助する自力的な性格が厳しく廃捨されることは化身土文類に明らかであるが、他力の立場においても信文類に、

誠知、悲哉、愚禿鸞、沈二没於愛欲広海一、迷二惑於二名利太山一、不レ喜レ入二定聚之数一、不レ快レ近二真証之証一、可レ恥可レ傷矣。（真聖全二、八〇頁）

とあるように、悲歎・慚愧という厭離の心の表明がなされている。

他力の立場から説かれる厭離の心は、往生の因に関わるものではなく、機の深信に伴う信心の利益として位置づけられているものと見られる。(16)親鸞の機の深信の理解は、衆生を哀れむ仏の悲智を通して知らされる自身のすがたであり、それゆえに悲歎が伴うのである。信心と厭離の心の直接的なつながりを見ない法然に対して、親鸞の場合は機の深信が自身のすがたを適示するものであるゆえに、両者が密接に関連づけられていると言うことができる。

こうした信心の利益として位置づけられる厭離の心は、本願力回向を綱格とする浄土真宗の立場から厭離の心を受容したものであり、本来、穢土から浄土へという方向性をもつ衆生の厭離の心を、それに先行する阿弥陀如来の本願力、すなわち浄土から穢土への方向性のなかで捉え直していったものと理解されるであろう。

これを善導との比較において論じるならば、『観経』を教学の基礎とする善導においては、厭離の心（ならびにその一類型としての機の深信）が衆生から仏へと表出する苦悩の叫びとして説かれていたわけであるが、親鸞は〈無量寿経〉ならびに曇鸞の『往生論註』を教学の基礎とすることで、厭離の心を仏から衆生へと恵まれる信心（機の深信）の利益として位置づけていったものと言える。

結論

本論にて考察してきたように、厭離穢土の思想は、大きくは〈無量寿経〉と『観経』の思想を軸として、これを解釈するなかで展開していった側面の強いことが窺える。そこで、改めて両経の思想的影響という視点のもと、その教理史的展開の大筋を述べることで結びとしたい。

浄土教における厭離穢土の思想は、主に『観経』の教えにもとづいてその地位を確立されたものと言える。穢土の救済に焦点が当てられ、穢土から浄土へという視点から教えが構成されたのである。

こうした『観経』の性格は、浄土教において苦悩する凡夫の救いという問題が深められていく上に大きな役割を果たした一方で、滅罪の観点から、浄土教が自力的な発想を強めていく素地を作ったとも見ることができ、ちょうどこうした『観経』の二面的な性格が、厭離の心の信的な性格と行的な性格に対応しているものと言える。

そして中国の浄土教においては、厭離の心の行的な性格が着実に浄土教のなかで採用されていくことになるが、一方、『観経』の説く罪業観がさらに徹底され、その上で〈無量寿経〉の本願思想が注目されるという展開のなかで、善導の浄土教の上では、本願による救済との関係において厭離の心が捉えられ、ここに仏の慈悲を呼びおこすための信的な厭離の心が浄土教の歴史の中で明確に説かれることとなる。

このように厭離穢土の思想は、主に『観経』解釈の歴史のなかで展開するのであるが、親鸞はこれを、まったく〈無量寿経〉の立場から、本願力回向を綱格とする教義体系のなかに取り込むことで、善導によって位置づけられた慚愧や悲嘆等の厭離の心を、仏から恵まれる信心の利益として位置づけていったのである。

略号

大正　…『大正新修大蔵経』
真聖全…『真宗聖教全書』
昭法全…『昭和新修法然上人全集』

参考文献（以下は論文に引用した文献の一覧である）

〈第一章〉

沖誠諦〔一九七三〕「厭欣思想への一考察」（『龍谷教学』八）

谷川泰教〔一九九四〕「厭離考（上）—Saṃvegaと Nivveda—」（『高野山大学論叢』二九）

内藤知康〔一九八五〕「他方世界としての浄土」（『龍谷教学』二〇）

中村元〔一九九五〕『大乗仏教の思想』（春秋社、中村元選集二一）

平川彰〔一九九〇a〕『浄土思想と大乗戒』（春秋社、平川彰著作集七）

同〔一九九二〕『仏教入門』（春秋社）

藤田宏達〔一九八九〕「他界」（岩波書店、岩波講座東洋思想一〇『インド思想 三』）

舟橋一哉〔一九五二〕『原始仏教思想の研究』（法蔵館）

水野弘元〔一九六五〕『仏教とはなにか』（教育新潮社、昭和仏教全集二の六）

森章司〔一九八七〕『仏教比喩例話辞典』（東京堂出版、国書刊行会より二〇〇五年復刊）

同〔一九九〇a〕『仏教思想の発見　仏教的ものの見方』（北辰堂）

同〔一九九〇b〕「「無常」「無我」の日本的受容」（『東洋学術研究』二九の四）

同〔一九九五〕『原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究』（東京堂出版）

〈第二章〉

池本重臣〔一九五八〕『大無量寿経の教理史的研究』（永田文昌堂）

入澤崇〔一九九九〕「観無量寿経の背後にあるもの」（仏教大学総合研究所紀要別冊「浄土教の総合的研究」）

大田利生〔二〇〇〇〕『増訂 無量寿経の研究』（永田文昌堂、増訂前の初版は一九九〇年）

沖誠諦〔一九七三〕「厭欣思想への一考察」（『龍谷教学』八）

辛島静志〔一九九九〕「『大阿弥陀経』訳注（一）」（『仏教大学総合研究所紀要』六）

沢田謙照〔一九八〇〕「仏教に於る懺悔の種々相と善導大師」（山喜房仏書林、藤堂恭俊編『善導大師研究』）

同〔一九八四〕「仏教の懺悔思想の展開に於る若干の問題」（仏教大学、坪井俊映博士頌寿記念『仏教文化論攷』）

静谷正雄〔一九七四〕『初期大乗仏教の成立過程』（百華苑）

末木文美士〔一九八〇〕「『大阿弥陀経』をめぐって」（『印度学仏教学研究』二九—一）

同〔一九九二〕『観無量寿経 般舟三昧経』（講談社、浄土仏教の思想二）

藤堂恭俊〔一九九五〕『曇鸞 道綽』（講談社、浄土仏教の思想四）

内藤知康〔一九九九〕『安楽集講読』（永田文昌堂）

平川彰〔一九九〇b〕『初期大乗仏教の研究』

（春秋社、平川彰著作集四）
藤田宏達〔一九七〇〕『原始浄土思想の研究』（岩波書店）
同〔一九八五a〕『観無量寿経講究』（真宗大谷派宗務所出版部）
同〔一九八五b〕『善導』（講談社、人類の知的遺産十八）
同〔一九九四〕『無量寿経　阿弥陀経』（講談社、浄土仏教の思想一）
宮井里佳〔一九九四〕「善導における道綽の影響―「懺悔」をめぐって―」
（『待兼山論叢』二八）
〈第三章〉
上野成観〔二〇〇三〕「法然と親鸞における懺悔の一考察」
（永田文昌堂、『法然と親鸞―その教義の継承と展開―』）
大須賀秀道〔一九四一〕「真宗に於ける厭穢欣浄の心」
（『大谷学報』二二―一）
梯實圓〔一九八六〕『法然教学の研究』（永田文昌堂）
笹田教彰〔二〇〇二〕「「厭離穢土」考―摂関期浄土教をめぐる諸問題―」
（法藏館、『日本仏教の形成と展開』）
高田文英〔二〇〇二〕「源信における逆謗の救い」
（『真宗研究会紀要』三四）
同〔二〇〇三〕「叡山浄土教と地獄」
（『龍谷大学大学院文学研究科紀要』二五）
同〔二〇〇五〕「厭離穢土について―笹田教彰氏の論考をうけて―」
（『印度学仏教学研究』五三―二）
同〔二〇〇六〕「法然浄土教と「厭離穢土」」（『真宗学』一一三）
永井隆正〔一九八九〕「『厭穢欣浄集』」
（増上寺、大谷旭雄編『聖聰聖人典籍研究』）
福原隆善〔一九七九〕「源信の凡夫観」
（『印度学仏教学研究』二七―二）
宮敏子〔一九八四〕「『観経』の下品と源信の下品―源信における経典的・経験的信仰をめぐって―」
（『文化』四七―三・四、東北大学文学会）
矢田了章〔一九七九〕「法然における業の思想」（『真宗学』六〇）
同〔一九九一〕「二種深信の教理史的研究」（『真宗学』八三）
同〔二〇〇三〕「二種深信の教理史的考察―法然・隆寛・聖覚における―」
（『真宗学』九九・一〇〇合併号）
霊山勝海〔一九八三〕「信の社会性―世をいとふしるしについて―」
（永田文昌堂、『親鸞における無常思想』）

註

① 森〔一九八七〕五六～五七頁、〔一九九〇a〕九九～一〇一頁、〔一九九〇b〕参照。

② 内藤〔一九八五〕参照。

③ 訳語としての「浄土」は、鳩摩羅什が『般若経』や『法華経』『維摩経』などを翻訳する上に用いたことで一般化していったことが指摘されている（平川〔一九九〇a〕第一編第一章「浄土思想の成立」、同第三章「浄土教の用語について」参照）。「穢土」の訳語の初出は曇無讖訳『大方等大集経』巻二〇（大正一三、一四一頁上）、巻三一（大正一三、二一六頁中）と見られる。曇無讖は鳩摩羅什の四

一歳後輩にあたる。

④ 曇無讖訳『大方等大集経』巻三一には、

世尊。我見二東方無量菩薩趣向西方一。以何因縁一。捨二浄妙国一趣向穢土一。善男子。西方過二此無量無辺恒河沙等諸仏世界一。彼有二世界一名曰二娑婆一。五濁具足。弊悪衆生充二満其土一。釈迦如来於レ中宣二説三乗之法一。為レ欲レ増二長仏正法一故。

（大正一三、二一六頁中）

と、菩薩が浄妙な国を捨てて穢土に趣向すると説かれ、それは弊悪の衆生の充満する娑婆世界で法を説く釈尊に会うためであると説かれる。

⑤ 舟橋〔一九五二〕四一頁、水野〔一九六五〕一一七頁、谷川〔一九九四〕等参照。

⑥ 静谷〔一九七四〕二四七頁、大田〔二〇〇〇〕九九頁参照。

⑦ 藤田〔一九八五a〕六〇～六一頁参照。

⑧ 末木〔一九九二〕一七六～一七七頁には、『観経』成立の背景に、中央アジアにおける罪業意識の深化・懺悔儀礼の流行という時代思潮があったことが指摘されている。

⑨ 道綽から善導への懺悔思想の影響について、その道筋は認められないとする見解もあるが（宮井〔一九九四〕）、懺悔の語のみに限定せずに両者の連絡を見るならば、善導の懺悔思想に用いられる表現は、『安楽集』の厭離穢土の思想からの直接的な影響が看取できる。

⑩ 沢田〔一九八〇〕参照。

⑪ 『観経疏』「散善義」

言二「深心」一者、即是深信之心也。亦有二二種一。一者決定深信自身現是罪悪生死凡夫、曠劫已来、常没常流転、無レ有二出離之縁一。

（真聖全一、五二四頁）

⑫ このように考える根拠の一つに、『観経疏』「定善義」華座観に見える以下の問答との類似性がある。

問曰。衆生盲闇、逐レ想増レ労。対レ目冥、若二夜遊一遠標二浄境一、何由可悉。答曰。若望二衆生惑障動念一、徒自疲労。仰憑二聖力遙加一致レ使二所観皆見一。云何作法、住心而令レ得レ見也。欲二作法一者、諸行者等、先於二仏像前一、至レ心懺二悔発露所造之罪一、極生二慚愧一、悲泣流レ涙。悔過既竟、又心口請二釈迦仏・十方恒沙等仏一、又念二彼弥陀本願一言。弟子某甲等、生盲罪重、障隔処深。願仏慈悲、摂受護念、指授開悟、所観之境願得成就。今頓捨二身命一、仰属二弥陀一。見以不レ見、皆是仏恩力。

（真聖全一、五一五～五一六頁）

傍線部の内容は機の深信と類似するもので、自身の絶望的な状況を仏に対して述べることは、それに続く「弟子…」の文から判断するに、仏の慈悲を呼び起こすための意味が与えられているものと見られる。そして、傍線部には直接的な感情の表出は示されていないが、その前の「極生慚愧、悲泣流レ涙」という慚愧・悲歎を承けるものであるから、同様の内容（仏への悲歎の表出）が意図されているものと推察される。

⑬ 『七箇条の起請文』

しかれともいまた煩悩具足のわれらなれは、かくは心えたれとも、つねに煩悩はおこる也。おこれとも、煩悩をは心のまら人とし、念仏をは心のあるしとしつれは、あなかちに往生をはさえぬ也。煩悩を心のあるしとして、念仏を心のまら人とする事は雑毒虚仮の善にて往生にはきらはゝ也。

（昭法全、八〇九～八一〇頁）

⑭ 矢田〔一九七九〕、梯〔一九八六〕二七〇頁参照。

⑮ 矢田〔二〇〇三〕参照。

⑯ 霊山〔一九八三〕では、『末灯鈔』第十六・十九・二十通に見られる「世をいとふしるし」（真聖全一、六八三頁、六八八頁、六九一頁）の意味する内容について考察し、機の深信にともなう無明煩悩に沈没する自己への限りない悲歎、信心の利益であると論じられている。